



初懐紙

信濃伊九撰釋

愚考初懐紙の百韻を梓行する者一書こ
しよ小鶴百韻と唱一て題号なり此百韻を
前五十韻後五十韻と二層よ成就しあり
ものなり花故事といふ注書を翁れ自
注と号して前五十韻の解ありとまは
茶五十韻よ數足千里出産後の産る不系
後日る不卜峻水似春の三子出産之世人
志るところありとまはねてりよ
日此書をさすうに勢の歩みなり

御ふをこのきこ去年の相北実

愚考日のもまを月の杖よ對しての雅
云るなり服を重代を祝して相の實と依
りしる相を鳳凰の栖す一きまをまは
出してこれ白依るなり御を階登をいする一
雪村の栞見えよゆく掉きして

一書ふ人名を此前の業ふいなるねん抄てよ出
雪村の栞はるなり栞を見えよ新といふ白なる主水
や貞徳の白りるなり志り一

雪村曰雪村

の栞人名よありなり宮古上下桂の男の田
中よありなり雪村新文なりこふいなり本振
の佳るなりを愛とよりなりくを云絶りなり
とる京保の昔洪水よありなり枯りなり
方ありなり彼比及洛中洛外の人ありなり今八智念なり

酒を盃幌よ入相れ月

林の山を木の弓の多うらむ
炭火竈出ねてそれあつらふ
里ししるまわりの形むら綴

愚考幌を初厨集よトハリるり門帷
戸幌とりし別暖簾とよ未弓ハ半弓
るり日本紀曰神后皇后四十六年百海
岳の宿古王より秋よとりし旅を未弓
とりし入の沃をひそこ集よ歌す
ゝ氣のる詔よむわをひそよ

詔よむし三島をおむるる連ハ
一書よ云翁の自注を歌しあひあむ花の
故りりとりし書有てその注よ曰箱根前
よをりりてるをわをひよせしる鏡向甚

はつ二

わをりりしと云く予はししわをりりらく
申しし翁の自注るりしりめりる甚しき
華説るりりそ連伊豆の三島を東海乃
るりりそ連を拜むるるとる旅り一きや亦川
より川邊一初るるといふをきやあ連ハ
往還るりり海乃とあそりし一きにるると
いふる往還りりりりりりりりりりりり
るをよそをわをりりりりりりりりりりり
心る神社会の曰伊予実徳患早祈之令
能因法師詠和歌傳大雨未不枯云々
三島の額を冬儀依理卿の書之日本
惣持守三島大明神と云く天孔川苗代
あよをきしとせあをりりりりりりりりり
神よの伊予國三島を拜むるる連ハ必

とやらさむすりそまのの詔ふ雨おかひせ
よと傳へるありこのふ本拠のありき
七ノ解をせつりくる花説ふういこい
三島とや由來なる面足号就ふきうて現連
あふは就化して石と形はは舟蓬友方丈
羸例の三島おひ出つ故よ三島とありき
三島をたて本帝天平五年に出現ありと
まゝも好宝亀年中伊豆に遷居ははよ
うは守とあり又法華經後集よを法乃
必りて能因は雨乞の歌をもとありぬ何
伊とち實徳るまはあそくくあり伊とれい
實説るくむその禮次下よ中

念佛よ狂よ傳い片くあり
愚考り或りのよ叡山の平等供奉とり

傳世をたをせとありて白夜の傳りて是詠
を履なりく系れ有下り是詠もて後船
をまゝのみ伊との西下り是を食して目を
送りたる西の守れ詠りて才子淨言何
國梨よ對面ありてこそ是連よりゆく系
志らけ出れりりとまゝせし連ハ三島も伊と
ありきり必定あり

濟りて一連歌の奥をせりす後

歌よせふ歌むら松れ舞

皆思の梨子打鳥帽子志るあり

五才曰松永彈正久秀志其の城よて是歌
舞りありし一歌りちりく録波を流く
ふよ今一白階むとて若白すきよあり
芦のひとむら淺沼の阿そきさくしよの世と

年してはけりなり 愚考 松永の侍之流
させり附る宗祇の佐るむ
うき世の侍仲を高のえをさあ
惜まし一宿の本槿のちるこいよ
のちすむよきめくこらし
山海舟乳との心猿の群るま
いのちを甲斐の代とも見えよ
法のと我の髪を 抱れおむ
はらう一れ記をとちる子の戸
笑日より車よりゆるを形れ陰
らし一を小雨のりゆるをさるま
のこる雪のりるこい一れめくこら
糸の故より流見え通るりより子細る
志にゆくは群 して髪をとちる歌

はら 四

毎きののめくこらり 流の形初
らけくこり眉をとりてさきま
く一嘆て膝よ見えゆる宿るまじや
愚考 源氏 柿の巻よ 政申 将助よりあ
み借る楽をさるるまその夜ゆるら
いとちるく侍をまじハ抄のし 毎よや
あよ源氏とあむの君の流り一の歌はま
し侍ちり流る中侍 侍るるてさる笑を
まのるよ志なきよまじ一 毎よなま
まのるよよ此おの侍ようこらに 毎を
ま歌る借る楽よ 愚一 次を 毎侍の
侍肩より侍るこむの君の侍よ目
何より侍て流る一まじ一 毎をこら
く一さくまらるる流の歌よ 毎のいよま

まうこうらハくつけりてゆきくさるり
 一書に漢か納玄の情又を楸の巻の五
 寸の如修法の侍ると注する更よそま
 ともたも一らぬくましくく暗くつ
 紫ふれぬくよ夫寛切よ入
 のも建とて一人のかけさる狐置
 阿らま月夜のくさるふ 傘
 石の戸極 鞍言の坊よ住らいて
 我三代の 刀 くら川 龍 治
 愚考伊賀守金名三代目よ日本龍治の
 字通と語を切らむ 伊賀守金名ハ日本
 カ工官職執奏の家扱つらよよてうく
 を切しりのよ建とてまを落し切て歌
 くらくさる処よその感勢をえん 秀三代

ばつ
 五

と依りまふらたりしよきよ成るり
 永録ま金名くく松孔燈
 通江の田植 天流より知くむ
 一書よ只上代の侍と金立くくといふ
 ありむくをいへるよ昔まおるり 勇略よ
 して金名のとてくまきさるり 傳く 徳美流
 通江ま 通さるり 田植るよの如 勇略よ
 をまて田舎と名らくよく 愚考是
 け菴の自注といをりけのら一句くよ
 注ありまよ下る 皆略く 半
 とく起て守揚よまむ 守考
 新よ 茶湯の浦 ありまよこ
 筑紫よて人の場をまよ 連て
 愚考守揚 ぬのくさるよ 崇平 獲衣よ

云々の事もむらさきらに甚し太宰女武
 氏等も侍を以ての事とて定めて
 申す事もむらさきの侍より
 弘毅の堂に於ての事
 待よしの侍を以ての事
 なよしの侍を以ての事
 むらさきの侍を以ての事
 門多魚を寸紙に
 眼を以ての事
 あつきの侍を以ての事
 愚考の侍を以ての事
 の武士の侍を以ての事
 続日本紀曰文武天皇四年於徳必定牧
 地穀牛言云く

侍の侍を以ての事
 乳の侍を以ての事
 愚考の侍を以ての事
 愚考の侍を以ての事
 古今集の侍を以ての事
 むらさきの侍を以ての事
 むらさきの侍を以ての事
 せの五文字を以ての事
 侍の侍を以ての事
 人侍の侍を以ての事
 酒盛の侍を以ての事
 愚考の侍を以ての事

その金山の洞とて盗人の住居し酒
とりの徳りある事とてさへあつた
と云ふ川上系師の侍あり

此玉の武仙とて名あり画よりせ

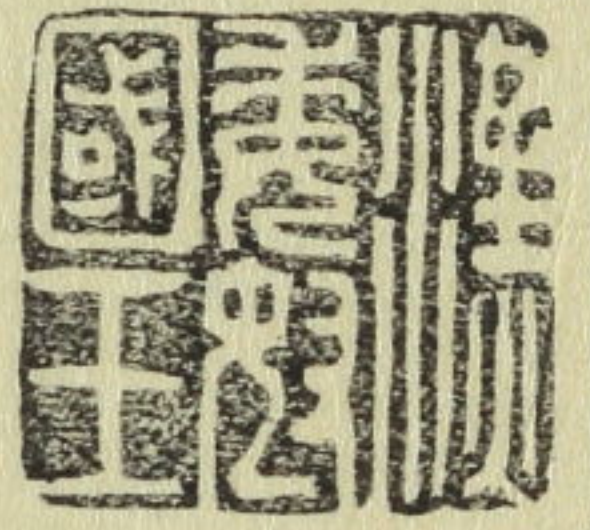
系よ汲すり醒の井 此 水

年元めれり十二月酒盛いさむを川上
系師此國の武仙とて日本武学日本紀曰
景行天皇二十七年冬十月熊襲を討
ちむ時たき十六景則十二月熊襲を必
ふいりありまを地取の体を伺ひる
あり熊襲の魁師より川上系師といひ強
力の大将ありき髪を解ききき女の姿よ
るありありひそくら系師の酒盛の時を伺ひ
叔を洞のうちより佩り入て系師の室よ入

女よその守よ交りて系師その妻よ子の
管巻れ惑ひて則ち身を擧て序を回し
て盃を掲げて酒をのませはく戯弄す時よ
夜更て人うすきぬ系師又酔ぬあり
日本武学洞のうちを抜て系師の胸
を刺りよいあり死よ及りぬ系師頭を打
てりよ系師はく待りありぬあり時よ系
師を殺りて待りありぬ系師死て云汝を殺
人をや對て曰吾を殺す大足彦天皇の子
名をてハ日本童男といひぬ系師又死て云
系を殺す玉此中の強力とてをりて當
時の法人系威力も務にりて後を死と
りぬありぬ 吾を殺す武力よ阿の七の
といひぬ皇子のよきものありぬを

めて後一き奴の陋一き口をとりて号
 号をたをらむ若融まらむや曰融一まふ
 則融して曰今より後皇子を号げまら
 て曰幸武皇子と称するなりといひ終て
 即胸を通りて殺しまふ今に至りて日本
 武尊と稱し中を彼系所より号げまら
 し号号の時よ系行天皇二十七年三月之
 さるしらの悪侍態襲といひまら筑紫小増
 公して人王十一代垂仁天皇八十六年丁
 己漢光武中元二年漢朝よ貢すりまよ
 のりて國王の印を鑄て賜ふ其印文化
 年中筑紫公よて古中よりぬり金印
 の摸方八分程白字小篆

八



印文 漢委奴國王
 文化三年迄千七百五十年也

後漢書東夷傳曰建武中元二年倭奴
 國奉貢朝賀使人自稱大夫倭國之極
 南界也光武賜以印綬云句の面を年
 とら時分のるりて彼窠をきり盗人共
 ち酒壺移ふと附しれとも次の筑志川上
 系所と引起して附するなりをそのの
 穴よ金山といひ強盗すみりまや金山の
 洞といひまらりて此國の武といひ日本武と
 り入陽一和福徑曰武略神通日本
 武術之大祖也尾刻焚田大明神是之

せして此書を猿小う法師の巻の
 画工よふとそと始て三白此書をいふ
 ちてそのころその巻をう法師よか
 翁川の名水をとて一木をてけりしに
 列醒井よとて波よきうん沢を日本武
 尊伊吹山の麓よとて大蛇を踏きぬい
 時水は火のさくくよかめきさるよ
 井の清水よといてそかめきをさる
 りよゆよ醒井と号するその故るは
 猿よう法師を奪ひて日本を東夷
 征伐と稱するよとて熊籠の故るよと
 よふ合せしるるなり
 玉川やおのく六つ此所よと
 江波しよふ年よりのよなり

卯花の巻 巻のりも 見ゆりよふ
 愚考傳字紙よ白後新報にうけ花の
 みるよふこのよと見ゆりよふと
 年よりのよたり花のうらな後報の
 名をよ
 みるよふのこ古新報の増するよ
 行こうこせを背くよよ
 南むく葛城の畑の雲消て
 親と基ををうけ 登れつて
 條はくろ櫛の廣葉ををうらなを
 費よふ 葉りや 林のよらる
 一書よ櫛の葉よ條はくろる古き
 神を
 とつていけよ急よ葉りや人の
 急を連る
 雲を附り林の心を慈の字る
 連ハ悲し
 き心をとをる
 愚考傳字載集字よ網

辰未とししふるまひしうりきり眞ししゆそ秋
の心を慈としりいそま此依例并極妙もも
出しり又右詩もも宜將愁字依秋心

鹿れ音をもものいそぬえもまつこめ
愚者も康の音也の音もてありしあまこり
るまろし心を入てすりのあるまろちりまを
通海の磯土もれ音響の音響の音響
の音もしく集申やういそぬえもまつこめ
そまそ美別あり再しあまこりまを一極よ
心ぬしりあまこりまをいそぬえもまつこめ
琴の音笛の音ももいそぬえもまつこめ
の音としりいそぬえもまつこめ
出らるやもあまこりまをいそぬえもまつこめ
大なるやもあまこりまをいそぬえもまつこめ

まぬるり席より入るあり梅咲や桃咲やと
いへしそし梨子ももや栗咲やとまをいそぬえ
るり梨子の花ももや栗れ花ももやとまぬえ
海ぬるりいそぬえ平木の磯響るまぬえ
とて雪向りありし響のまぬえもまつこめ
してまをわしりの族実ももその罪流るまぬえ
は系新名目の歌ぬけしそまぬえもまつこめ
歌まぬえも白梅 磯響のまぬえもまつこめ
し割しあまこりあり花の表と伝りし
たもまろし名ぬるるまぬえもまつこめ
つらまろしやあまこり甘き名目ももま
ぬれ族るく見え又一つまぬえもまつこめ
とまぬえもあまこりまぬえもまつこめ
まぬえもあまこりまぬえもまつこめ

うらふしき男の斬りてむ 月
台の雨杖 七里をめぐりてむ
何弱河内めをれ 川面
水らるる方未だく音ハ師をて
松をせりりの 院しをて用
二月の蓬萊人むすせむらや
婦よん牛の 産き日の新
胸物もぬ熱の縮をて織りて
おりのいぢりもひ草の菊や
暮の多ふを柵依りて 抱一泣
木魚きここゆる山陰り
因人たをやうて休むら 朔月夜
赤とくし 物守 長らの花をさ 合
同し時義し 禿の若をて替り

心るうらむ 世を 悼れ ころ
三なるめむを野の橋よりしれ山
一書よ傳よ曰よりし野の橋を正花るるを
おろよせりて種く口傳ありの所傳を受一
ありしころまの字れくはるま家
飲膳をわむまあきのみまあ
行よの舟あり入洋のうはく
愚をり撰集およむりし橋下五竹の墨と
りよ西よ上高むすして初よ尾伝りのむを
室の持女よを傳りのきりつてあやそのあつ
もあつころころのや 醜醜中納を敬基
卿よおのちを運をりて一海の石と能ふるむ
伝りころの傳りきりつてあやの傳りむむ
すといあらむをりて室よころをそのち

又や於此のありありいさし〜侍らるるり
とくや或時中納言の目れ人の新よのつぎ
西國よりの船さる一羽りたるを何いえて髪
を切てみちえ〜紙よ引色みして〜書
し〜書しをぬ〜きとるるめめめ〜
と〜りて〜袖そ〜と〜ぬと書て〜ぬふ
るけ入侍りて後ひ〜す〜れひ〜えてあ
あよ高急角梅ら〜てありひす〜りて侍り
り〜と〜り申候を〜見〜て〜雨〜と〜流
〜し〜の〜の〜こ〜して〜危〜時〜く〜く〜
烟管急張〜侍りり〜の〜終〜ふ〜い〜あ〜
從生〜して〜侍り〜る〜心〜人〜多〜く〜侍りり
唐の物〜して〜の〜代〜を〜朽〜たる〜丸〜木〜の
〜え〜侍り〜〜を〜柱〜る〜〜ふ〜あ〜そ〜只〜あ〜し〜

あつて〜し〜本〜の〜さ〜あ〜く〜思〜い
や〜も〜侍り〜て〜此〜危〜の〜物〜を〜さ〜る〜れ〜た〜り
と〜を〜〜〜侍り〜あ〜り〜〜さ〜る〜れ〜た〜り
侍れ眼ありの〜
行海子〜し〜侍り〜ふ〜驚〜り〜りて
梅〜り〜〜あ〜り〜〜自〜ら〜り〜り
むら〜る〜よ〜石〜の〜灯〜火〜吹〜き〜ぬ
地〜り〜夜〜の〜沖〜も〜あ〜は〜く〜た
伊勢を〜ふ〜月〜よ〜旭〜の〜有〜る〜事
樽撰来て〜梅〜は〜く〜ぬ 女
思考は僧止上よ海侍すり〜ま〜て〜林〜二〜白
〜の〜例〜る〜事〜ハ〜僧〜侍〜に〜定〜ん〜ら〜り
〜り〜あ〜〜り〜〜さ〜る〜〜り〜あ〜ら〜り
あ〜ら〜り〜〜あ〜ら〜り〜〜さ〜る〜〜り〜あ〜ら〜り
あ〜ら〜り〜〜あ〜ら〜り〜〜さ〜る〜〜り〜あ〜ら〜り

此の連なりを古今の通例ありの傳ふ曰村
るる曰月と七月とよ月押はるりむす
ひ込てを傳ふ一梅すこゝのまはるは月
るまはむらるるを傳ふのまはるは月
夜の白く見えぬあり祭斗ふおく蛇を
暑申夜ふりしつるりこ村るる七月と
見えて蛇とりの夜を殘暑の傳を指せしりさ
すまはむらるる白より山に白蛇傳あり又
それを伝ふる林孝よりるの蛇とりの夜を林と
るるといふるそのまはるの蛇傳と次ふ伊勢
ふ橋つらるるを昔伊勢の記ふ曰は換の橋ふ
てよめり引一はくむ蛇まの精を年よりりて
や朽よりるるの記のはり一是ハ新嘗の祭
ふ新まはるるを傳ふりしつて演一出あり

はの 十三

ゆふみきりの橋とるる中こをの白の橋の
朽とまはるる傳本撰來てはくるとるり愚亮
東都よりり一はく去人伝傳の傳書るるとそ
見すりる傳曰ふぬてぬ百餘ふ二つ年有一
又よぬの類白洞を袖ふぬを蛇ふ新はす
月を山よ林よ蛇とりの蛇まの夕よ蛇の
おとるる入るるふまはる神心の家やるるを
まはるりしつて傳ふり新ありまはるりしつて
の本体とり入るる地名と藤傳のてよとんた
りして暑野の敷の伝をえりしつて蛇とりの夜
の傳をえりしつて蛇の傳の傳の傳の傳の傳
まはるりしつて蛇の傳の傳の傳の傳の傳の傳
るるの傳の傳の傳の傳の傳の傳の傳の傳の傳
山陰ふ金すを干のまはるる蛇の字と混す

一々々々を本件と心得るの上よりあるを
爾も自在の法にいつくはるるの徳徳も
らるる学文らるるを不自由の事と又て
のりらるるを二つはりのりらるるを
のりらるるの云々も二つあるの事
出でて見よとあるを自痛の事
もびくしてある法に
をよらしてあるを二つあるを
らとありらるるを二つあるを
をよらするも稀にしてあるを
よ及んずのりらるるを
も
乞ふと大切なるを
二つ

三つは徳の人の事
徳長の治るる代
吾士とよらるる
愚考徳長の治るる一里塚を築て徳長の
人をあひあひその徳徳をた
遠らといつくはるるを二つあるを
うこりらるるを二つあるを
まの世の例を他國よ
るり又唐國の見の名を
ゆりといひあて
て貞徳るるを二つあるを
るり少きふ
のふ一々々々も未考
曰東海上有居士仕
焉 華仕兄才二人

世之議曰吾不臣天子不友諸侯耕而食之墾而殖之吾不求於人無上之君無君之祿不仕而事力云又祖庭事苑曰居士之四德といひ不求官士寡欲蘊德居財大富守道自怡云
紅ふ牡丹十里の糸を分て
愚考東坡賞牡丹詩ふ十里珠簾半上鉤
さよふ牡丹ふ十里糸の名あり千里の糸とすの多非あり

雲す心若ふ歩り陽を
岩根ふ歩ききく花をを前ひす
笑一や云井の糸法師とす
は僧さ糸考法家の字糸を待
物の糸意よりなきやうふ糸也

管絃ををさうす膏ををぬり
何一更れ盧山ふとありとありと
愚考管絃とをを絲竹の糸とあり
白虎通曰八音者樂記ふ土曰埤行曰管
皮曰鼓鞀曰笙絲曰弦石曰磬金曰鐘木曰祝故云或を管絃或ハ鐘鼓と合す
ふらりとありとありの盧山ハ枕詞ありて
枕詞を日本の花文ありとあり日本
盧山ありとあり山寺とあり後流法院寛元三年
任心覺瑜上人の建きありて糸与所
今出川通よりて糸糸あり昔の惠
遠法師老翁と化して盧山ハ二字を
任心ふ授くありて日本盧山天台講寺
と号す

子孫とありあり 説者の姓名
并いふはすみなる川の川傳の
尾書よりあり 松の志く説
藤花の七書よりあり 花自一
連気ふとく説書せたりき
一本ありこよありとすり非るり
愚考傳より曰花より意を伝のけは意を
一よりして控りくとも古今の例と花の
白意よりして前後より意の兼あり故ふ
女子とすりき甚しきるり 古歌より
よもありは又さきいみよありは言傳や
ゆり子との意の傳すりよありは言傳
ことありきふものを又傳り納きよ傳
るりありきあることありきよありき

るはりしきねとゆりきこの表よりありき
一傳りしきありきむよそをりしき連一人
を傳りきとりよ前白れ傳りを引起し古
歌をとりて花の伝あり 新古今集より
のくれ十書のすりあり七書より君を
せせりて我三書より藤花を則一人傳り
りしき伝りて三書七書の歌をとり出せ
りしき揚白の伝あり 意の言をよふむ
けり花の伝あり 昔ありきいふはゆり
さし伝ありとてさる連りては藤門のさ
る手この手本とて謂はれり又曰揚白小娘
て意をきりしき意を一よりして控り
の義ありきさるり花より意を仕りける
意味ありき



